

見えないものを見る

東京新聞 2014 年 4 月 19 日（土）の夕刊のトップ記事に驚いた。それは恐ろしい写真だった。キビタキという福島県の鳥になっている鳥を、放射線写真（オートラジオグラフィ）で写したところ、体に降り注いだ放射性物質が、黒く写っているのである。また、翌日 20 日（日）の朝刊の記事を見て、胸が苦しくなると同時に、よくぞこれを報道してくれたと思った。

それは<放射線を撮る>と題した記事と、<「被ばく」くっきり>と題した記事である。見えず、匂わず、まったく見えない放射能が今、日本を襲っている。見えない存在ながらも、長寿を満喫している日本人の寿命をはるかに超えて、延々と毒を放出し続けるのが放射能だ。それが確実に生き物を蝕んでいることを、オートラジオグラフィという手法でビジュアルに示された方々がおられたのだ。



2011年11月、福島県飯舘村で採取したモミジの放射線写真＝写真は森敏さん、加賀谷雅道さん提供（東京新聞より）

見えなければ本当に気づきにくいもので、見落としやすいものになってしまう。でも見えなくてもあるということに気づく感性がとっても大切である。

4月19日は夫の誕生日であった。夫への愛、これは胸(?)の中にあるものか、それとも頭(?)の中にあるものか、わからない。まったく目に見えない代物である。でも、確実にある！と言えるために、さまざまな形をとって、表現する。たとえば、お料理を特別にしてあげる。

今日、20日はイースターである。復活されたイエスさまは、目には見えない存在である。けれども、聖書を読むと、イエスさまの力を感じる。お祈りをすると、イエスさまの慰めを感じる。また、友人の優しい振る舞いにイエスさまの愛を心にいっぱい受け止めてしまう。(2014.4.20)